今も活やく　知恵　を出し合いつくった水路

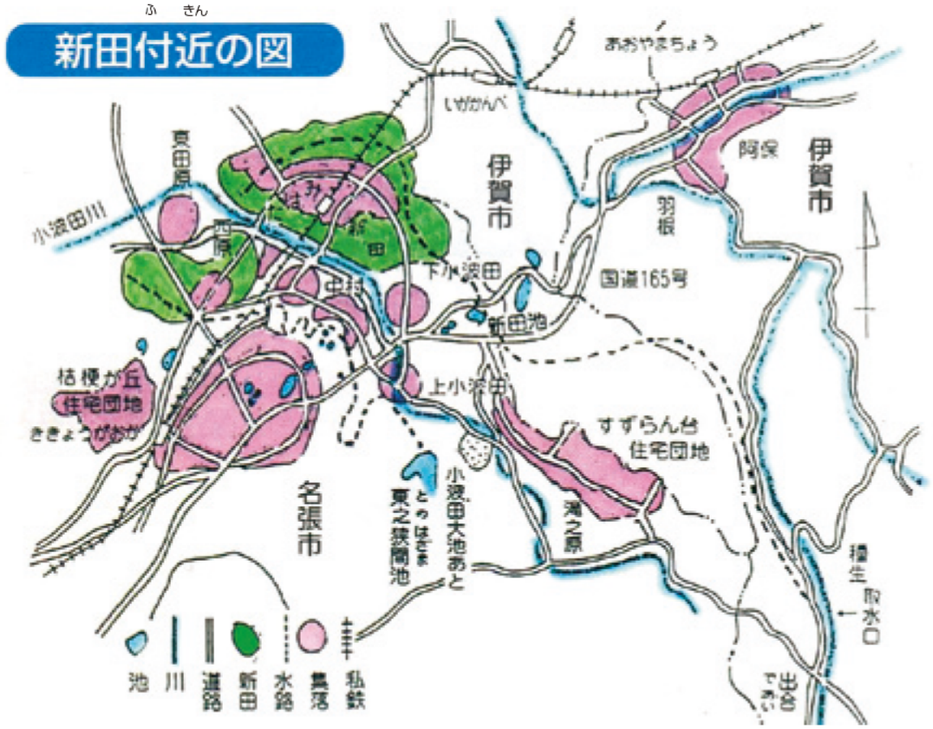
美濃波多（美旗）新田を開く

名張市では、約340年前に作られた「新田水路」で運ばれる水が、今でも新田地区の米作りに欠かせません。

新田水路にかかわる人たちの願いを考えてみましょう。

名張市には、広い土地がありながら、水がえられないために水田を開けないところがたくさんありました。「水さえあれば。」というのが、この地いきに住んでいる人たちみんなの願いでした。

新田付近の図



新田開発に乗り出す

名張市の北西部にある美旗小学校や美旗古墳群のまわりは、昔「美濃が原」とよばれた一面の野原でした。この野原が開かれ今のようなりっぱな田畑ができたのは、350年ほど前のことです。藤堂藩の命令で、この地の開こんを進めたのが、加納直盛と直堅の親子でした。

二つの池をつくる

伊賀の奉行をしていた直盛は、伊賀の国には田が少ないので、もっと田を開こうと思い、あちらこちらを見て回り、美濃が原に目をつけました。ところが、美濃が原は、小高いおかの上にあり、川が流れていません。田にするには、なんとかして水を引かなければなりませんでした。

そこで、滝之原と上小波田に二つの池をつくる計画を立て、伊賀中から数万人を集め、東之狭間池と大池をつくりました。さらに、この池から水を引き、約100ヘクタールの田を開き、200戸ほどの家が建つようになりました。

しかし、せっかくでき上がった二つの池にも、つつみが切れたり水が足りないというなやみが出てきました。

美濃波多（美旗）新田を開く

池にかわる用水路（新田水路）

そこで、直堅は、約15ｋｍもはなれた伊賀市の高尾から川の水を引く計画を立て、用水路（新田水路）をつくることにしました。

今のような道具や機械がなかった上に、いくつもの山をこえて水路をつけるため、たいそうむずかしい工事になりました。夜中にちょうちんや松明の明かりを使って水路のかたむきを決めたり、水不足にそなえて水路のと中に池（新田池）をつくったり、いろいろな知恵を出し合いながら進めました。約２年かかり、完成したといわれています。

ちょうちんで水路のかたむきをはかる（想像図）

これにより開こんが進み、田がたくさんつくられるようになりました。

※松明…しょう明として使うために、手で持てるようにした火のついた木切れなど。

歴史ある水路を未来へ

今でも新田地区の農業用水の多くは、新田水路でまかなわれています。新田地区の人たちは今も力を合わせて、この大切な水路を守っています。

田植え前の４月初めごろには、水路をきれいにします。また、４月から８月末まで原そく週２回、毎日二人一組で、伊賀市の高尾から新田までの約15ｋｍを歩いて、水路の見回りをしたり、水もれを直したりします。

大切な用水を田に引くための新田水路

先人たちが守ってきた水路や田んぼをしっかり守り、未来に残すことがわたしたちの使命です。

新田地区の人

「わたしたちの名張市」（名張市教育委員会）、ほかから作成

考えてみよう

1 現在、美濃波多新田となっている土地は、以前はどんな場所でしたか。
2 美濃波多新田のたくさんの田んぼは、どのようにして開かれたのですか。また、その時、どのような苦労や工夫をしましたか。
3 二つの池や新田水路をつくった人たちは、どんな気持ちで工事に参加していたと思いますか。
4 どうして、新田地区の人は、水路や田んぼを守ることが、使命だと思っているのだと思いますか。
5 あなたの町にも、守っていきたいと思う場所はありますか。また、なぜ守っていきたいと思うのですか。